

コルナイ・ヤーノシュ[著]
A GONDOLAT EREJÉVEL

■ コルナイ・ヤーノシュ自伝 思索する力を得て

「現実にこだわる」理論経済学を貫く

評・高橋 伸彰 (立命館大学教授)

本書の著者コルナイ・ヤーノシュはハンガリー生まれのユダヤ人であり、社会主義経済の批判的研究で高い評価を受けた経済学者である。著者の家族はナチ支配による迫害を受け、父はアウシュビッツに送り込まれ、兄は労働キャンプに「狩り出され」て他界した。辛うじて生き延びた著者は、ソ連軍がドイツ軍とハンガリーの矢十字(ファシスト)党を粉砕した時には心の底から解放感を覚えたと言う。

戦後は共産主義者として党の機関紙でペンをふるう。しかし、取材を通して計画経済に内在する問題(不足の恒常化)に目覚め、研究者に転じて、なぜ社会主義経済の理論通りに計画や管理が機能しないかをテーマに学位論文を書いた。その後ハンガリー

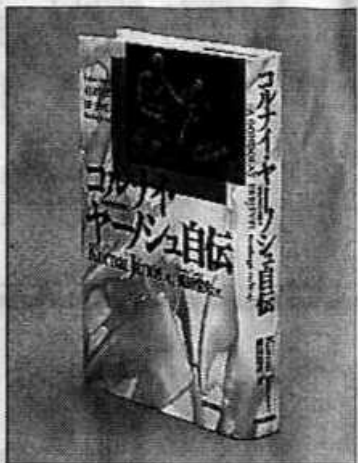
動乱が起き、ソ連軍は今度は戦車で民衆を鎮圧し、ソ連の傀儡と化した党・政府は容赦ない粛清を続けた。

マルクス主義に批判的だった著者も執拗な尋問を受けたが、ハンガリー経済の「現実」に依拠した研究を続けるために「国を離れなかった」。

理論経済学者の著者が「現実」にこだわったのは、本質的な点で現実と理論が乖離している場合、修正されるべきは「理論」だという信念があったからだ。それが一般均衡論の非現実性を批判した『反均衡の経済学』、および計画経済の問題を「吸引(供給不足)」や「ソフトな予算制約」で分析した『不足の経済学』(未邦訳)などの著書に結晶している。

著者の分析は生産性の面で資本主義が社会主義を陵駕した背景にも及ぶ。不足とは正反對の過剰(モノ余り)が、生き残りを賭けた企業による、新技術や新製品の開発を促進したと指摘するのだ。

しかし、冷戦の終焉に伴う体制転換でハンガリーにも誕生した資本主義は、かつて人々が期待した社会主義と同様にユートピアではない。ハーバード大に招聘されたときも一年の半分はブダペストに戻り、無給で研究することを条件にした著者は、権力の恐怖や富の誘惑に抗し、「思索する力を得て」、78歳の今も自らの眼で見た現実を基に新たな課題に取り組んでいる。



盛田常夫訳、日本評論社・4935円/
Kornai János 28年
ブダペスト生まれ。ハーバード大名誉教授。